

フレイル(身体や精神等の機能低下)や認知症などの生きづらさを“わがこと”として考えるワーク

まつもとふかし
松本市 A 地区にお住まいの松本深子さんのふだんの暮らしを想像してください

対象	- 松本深子さん、80 歳代前半、一人暮らし、現在は町会未加入、介護保険は使っていない。 - 自宅内は伝い歩き、玄関まで出てこられるが、外出はしていない様子。
家族関係	- 結婚はしておらず、定年まで看護師として勤務。現在は、自宅(一軒家)に一人暮らし。 - 親族が市内にいたが、深子さん自身は親族の連絡先が分からなくなっている。そのため、親族については正確な情報が得られていない。
これまでの深子さん	- これまで深さんは近所付き合いが少なく、人付き合いはあまりないようであった。 80 歳になったのをきっかけに車の免許を自主返納した。その後、買い物には歩いて出かけていた。 - いつからかは不明だが、民間の配食サービス(月～金)、牛乳の配達(1 回/週)を受けていた。 - 自分の体調は自分で管理できていた。深子さん自身も「悪いところはどこもないので、受診したことはない」と言っており、深さんの自己管理への自負が感じられる。
地域との関わり	- 深さんの暮らしを知る方の話では、かつては町会にも加入し、健康づくり推進員として活動していたようだ。深さんの周囲に空き家やアパートが増え、町会未加入者が多くなっており、隣組が疎遠となっていた。町会から抜けたのがいつ頃かは不明だが、何度か加入を勧めたが断られていた。 - 深さんは「以前は近所の方が声をかけてくれ、ゴミ出しをしてくれた」と話していたが、最近はそうした関わりも無かった様子で、現在、玄関先や室内にまとめたゴミが溜まっている状態である。 - 地区民生委員も、在宅一人暮らし高齢者数の確認訪問や、日赤奉仕団による「ふれあい配食」の声掛けを行い、11 月～3 月は月に 1 回、昼食弁当の配食を受ける支援を行っていた。
最近の深子さん	- たまたま訪問した国勢調査員が生活状況を聞いたところ、深さんは「一日一食の生活で、15 時位になるとふらつく。今後のことが不安だ」と話をする。国勢調査員は町会未加入の深さんの相談を、どこに繋げればよいのか困り、地区文化祭で一緒になった、生活支援員に相談を持ちかけた。 - 相談を受けた生活支援員は民生委員と同行訪問し、深さんには同じ話の繰り返しがあり、話題も飛びがちな状態であることに気づく。この段階で本人から「介護保険の支援を受けていてもよい」との話が出たので、地域包括支援センターに連絡し、生活支援の相談を持ち掛けることになった。 - その後、民生委員と地域包括支援センターの職員が訪問し、深さんから話を聞くことになった。はじめ深さんには“困った感”がないことが確認されたが、話を聞いていると、最近は健康診断を受けていないこと、十分な栄養が摂れていないこと、入浴が出来ておらず不衛生な状態にあること、体力の低下から掃除やゴミ出しに困っていたことが分かってきた。それをふまえて、深さんには介護保険で支援ができることを伝え、診断書をもらうために病院を受診することを約束した。 - その 1 週間後、民間配食担当者より「届けたお弁当が 2 日分置きっぱなしになっている」という連絡が地域包括支援センターにあった。いつもは手渡しだが、この 2 日ほどは奥から「玄関先に置いて」という返事に従っていた。地域包括支援センターの職員がすぐに訪問したが、返事はあるが様子がわからない。声かけしながら室内に入ると、深さんは炬燵に潜り込み「食べることを忘れていたわ」と言う。いつから食べていないか自分でも分からなくなっていた。意識はしっかりしていたが、脱水状態が確認され、生命の危険性があると判断し、本人の承諾のもとで救急搬送、そのまま入院となった。 - 地域包括支援センターから松本市高齢福祉課の地区担当ケースワーカーに身上調査を依頼した。同時に、過去のスケジュール帳から連絡先をたどることで姪と連絡が付き、支援の引継ぎを行った。

- 松本深子さんの事例は、A 地区に特徴的な高齢期の生活課題をもとに作成したものです。
- 部分的には A 地区であった本当の話です。